

チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』

——「詩と真実」について——*

平 野 順 雄**

An Essay on Charles Olson's "Poetry and Truth" in *Muthologos*

Yorio HIRANO

キーワード：ミュトス、ミュソロゴス、ブラック・マウンテン派詩人、チャールズ・オルソン、
『マクシマス詩篇』

I. 「詩と真実」

『ミュソロゴス』(*Muthologos*, 1979) は、1963年から1968年の間にアメリカ詩人チャールズ・オルソン (Charles Olson, 1910-70) が行なった講演や対談、座談、及びインタビューを集めたものである。その内容を紹介すると以下のようになる。

Muthologos 第一巻

- ① 「歴史について」 (On History, 1963)。The University of British Columbia Poetry Conference で、Robert Creeley, Robert Duncan, Allen Ginsberg, Phillip Whalen らの詩人たちと共に行なったパネル・ディスカッション。1963年7月29日。
- ② 「マッシュルームの下で」 (Under the Mushroom, 1963)。1963年11月16日に、ニューヨーク州 Buffalo から40マイル東にある Gratwick 夫妻宅へ、オルソンは妻の Betty とともに招かれた。1960年12月と1961年2月に薬物学者 Timothy Leary が行なった実験のことを、6名から7名の集団に語った。
- ③ 「カジュアル・ミソロジー」 (Casual Mythology, 1965)。The University of California Poetry Conference at Berkeley で行なった講演。1965年7月20日。
- ④ 「バークレイでの朗読」 (Reading at Berkeley, 1965)。The University of California Poetry Conference で行なった朗読。1965年7月23日夜。Allen Ginsberg, Robert Duncan, Robert Creeley, Lew Welch, John Wieners などの詩人が聴衆の中にいた。
- ⑤ 「チャールズ・オルソンとエドワード・ドーン」 (Charles Olson and Edward Dorn, 1965)。The University of California at Berkeley の芝生の上で、Edward Dorn と行なった対談が映像化

* 本稿は、2011年10月22日、椋山女学園大学において開催された日本英米詩歌学会第24周年記念大会で行なった研究発表「C. Olson: *Muthologos*—「詩と真実」について」に基づいている。

**人間関係学科 教授

された。④の朗読後のことである。1965年7月24日午後。

- ⑥ 「グロスターのオルソン」(Olson in Gloucester, 1966)。1966年3月12日に Richard Moore がオルソンの自宅を訪ねて、教育テレビシリーズ用 (the National Educational Television series) の映画を作製した。その映画フィルムのうち、編集時に不要とされたものを文字化したもの。

Muthologos 第二巻

- ⑦ 「コートランドでのトーク」(Talk at Cortland, 1967)。ニューヨーク州立大学 Cortland 校に招かれて行なった講演。対象はニューヨーク州立大学に所属し、詩を書いている学生であった。聴衆の中には、ニューヨーク州立大学 Buffalo 校の学生がいた。その中にブラック・マウンテン大学時代から、オルソンの学生であった John Wieners の姿があった。1967年10月20日。
- ⑧ 「詩と真実」(Poetry and Truth, 1968)。ウィスコンシン州 Beloit College で行なった連続講演。1968年3月25日から3月29日まで。
- ⑨ 「ブラック・マウンテンについて」(On Black Mountain, 1968)。上記⑧の現代詩に関する連続講演開催中の3月26日に行なった非公式のトーク。1968年3月26日。
- ⑩ 「BBC インタビュー」(BBC Interview, 1968-69)。BBC での放送用に予め作成した原稿をオルソンが修正した(1968年7月27日)後に放送したもの。1969年8月26日。
- ⑪ 「グロスターでのインタビュー、1968年8月」(Interview in Gloucester, August 1968)。オルソン著 *Call Me Ishmael* をボストンで読んだスウェーデンの女性が、グロスターの自宅にいるオルソンを訪ねて、インタビューを行なった。
- ⑫ 「パリ・レビューのインタビュー」(*Paris Review* Interview)。パリ・レビューの Writers at Work シリーズのインタビューが、グロスターで行なわれた。1969年4月16日。詩人の Gerit Lansing と、オルソンの友人ハーヴェイ・ブラウン (Harvey Brown) が同席した。
- ⑬ 「すべてが問題となる人たちをおれは知っている—チャールズ・オルソンとハーバート・A・ケニーの対談」("I Know Men for Whom Everything Matters": Charles Olson in Conversation with Herbert A. Kenny, 1969)。マサチューセッツ州 Manchester (グロスターから5マイルほど南西に位置する)にある Herbert A. Kenny 宅で、1969年8月の下旬に行なわれた対談。Kenny は、the *Boston Globe* に勤める新聞記者である。

つまり、『ミュソロゴス』は、詩人の最後の10年間の活動を記した公式資料なのである。

本稿は、『ミュソロゴス』第2巻所収の「詩と真実」をオルソンの詩学の要として考察する試みである。そのためには、まず「ミュソロゴス」という語を理解しておく必要がある。この語はオルソンの作品の中では、『マキシマス詩篇』(*The Maximus Poems*, 1975)の「手紙23」に初めて現われる。「手紙23」を見よう。

Ⅱ. ミュソロゴスの意味

1. 「手紙 23」検討。

Letter 23

[...]

What we have here—and literally in my own front yard, as I sd to Merk,
asking him what delving, into “fishermans ffield” recent historians...

not telling him it was a poem I was interested in, aware I'd scare him
off, *muthologos* has lost such ground since Pindar

The odish man sd: "Poesy
steals away men's judgment
by her *muthoi*" (taking this crack
at Homer's sweet-versing)

"and a blind heart
is most men's portions." Plato

allowed this divisive
thought to stand, agreeing

that *muthos*
is false. *Logos*
isn't—was facts. Thus
Thucydides

I would be an historian as Herodotus was, looking
for oneself for the evidence of
what is said [...]

What we have in this field in these scraps among these fishermen,
and the Plymouth men, is more than the fight of one colony with
another, it is the whole engagement against (1) mercantilism [...]
and (2) against
nascent capitalism except as it stays the individual adventurer
and the worker on share—against all sliding statism, ownership
getting in to, the community as, Chambers of Commerce, or theocracy;
or City Manager

(Charles Olson, *The Maximus Poems* 104-105)

手紙23

(略)

資料によれば一まさに、うちの玄関先で起こった事件だ。「フィッシャマンズ・フィールド」に関して、最近の歴史家がどんな研究をしているのか、マークに聞いてみた時…おれは、詩に関心があるのだと言わなかった、そんなことを言おうものなら縮み上がってしまうだろうから。ピンダロス以後、ミュソロゴスには拠り所がない

頌歌詩人ピンダロスいわく、「詩は
偽りの物語によって

人間の判断力を奪い去る」(ホメロスの
美しい詩に向けられたこの皮肉)

「ゆえに、ほとんどの人の
心は盲目なのである。」これを見て

プラトンは、分割する思考を
正しいと支持した

ミュトスが
偽りで、ロゴスは
偽りではなく、事実だ、と認めたのだ。かくして
ツキュジデスの登場となる

だがおれは、語られていることの証拠を
自分で探すヘロドトスのような歴史家
でありたい。(中略)

この原野で起こったグロスター住民とプリマス住民との争いは、
一つの植民地ともう一つの植民地との争いに
とどまらない。それは、全面戦争なのだ。敵は、まず(1)商業主義(中略)
それに(2)生まれたばかりの
資本主義だ。ただし、個々の冒険商人と労働者が、分け前にあずかる
段階に留まるなら、話は別—敵は、墮落する国家主義全体なのだ。所有権が
共同体に割り込む、商工会議所や、神権政治、
あるいは、市政担当官の形をとって

(チャールズ・オルソン『マクシマス詩篇』104-105頁)

引用箇所1行目に出て来る人物「マーク」(Merk)とは、ハーヴァード大学の歴史学者フレデリック・マーク(Frederick Merk)を指す。人と文明が西へ向かって動くと考え、「西への動き」(Westward Movement)という概念を提唱した人物である。オルソンは、学生の時、この歴史学者の「西への動き」という題目の授業に出て大きな影響を受けたが、この詩の中では、自分(あるいは、詩の語り手マクシマス)の方がフレデリック・マークより偉い、という態度をとっている。

『マクシマス詩篇案内』(A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson, 1978; 以下A Guideと略記)の著者ジョージ・F・バタリック(George F. Butterick)によると、「フィッシャマンズ・フィールド」(“fishermans ffield”)は、オルソンが子どもの頃、両親とともに毎年夏を過したマサチューセッツ州アン岬(Cape Ann, Massachusetts)、グロスター港(Gloucester Harbor)の

西岸付近にあった (Butterick, *A Guide* 1x)。それは、新大陸への最初の入植者が開墾した場所を指す地名である (Butterick, *A Guide* 145)。だから、一行目の「うちの玄関先で起こった事件だ」は、誇張ではなく、事実なのだ。イギリスから入植してきた漁師たちは、漁業の他に畑仕事をする必要があった。漁師の耕作地を「フィッシュマンズ・フィールド」という名で呼んだのである。原文の引用2行目では、「フィールド」の“f”が“ff”となっているが、これは印刷ミスではない。第一次入植が盛んだった17世紀には、綴り字がまだ確定していなかったため、“f”が一つの綴り方もあれば、“ff”とする綴り方もあったのである。

「手紙23」冒頭では、「フィッシュマンズ・フィールド」に関する歴史的事実が、語り手マクシマスの現在の目で確認される。続いて詩は、ミュトス(muthos)とロゴス(logos)の対立を語った後、再び歴史的事実の考察へ戻っていく。「手紙23」の4行目にミュトスとロゴスを連結したような語「ミュソロゴス」(muthologos)が出ており、「ピンダロス以後、ミュソロゴスには拠り所がない」とされている。そして10行目から15行目には、ピンダロスが主張する、偽りの物語(ミュトイ)と事実(ロゴス)の違いをプラトンも認めた、と書かれている。しかし、ミュトスが偽りの物語で、ロゴスは事実だというピンダロスの考え方は正しいのだろうか。

2. 『ロゴスのアート』

『マクシマス詩篇案内』で、ジョージ・F・バタリックは、「手紙23」のミュトスとロゴスに関する注に、J・A・K・トムソンの『ロゴスのアート』(J. A. K. Thomson, *The Art of the Logos*. London, 1935)を挙げる。バタリックが引用する箇所を見よう。

So far as we know, the first to distinguish between Muthos and Logos, was Pindar. ‘Surely marvels are many,’ he says, ‘and methinks in part *Muthoi* adorned with cunning fictions beyond the true Logos do deceive the minds of men.’ Here Muthos, the false Story, is contrasted with Logos, the true. Again he says, ‘[...] Poesy steals away the judgments of mankind by her *Muthoi*, and a blind heart is most men’s portion.’ Here again Muthos is the false story. It is from this usage that ‘myth’ has come to mean (in the words of the New English Dictionary [Oxford English Dictionary]) ‘a fictitious narrative.’ The reason for the choice of Muthos rather than Logos to designate the fictitious narrative is fairly clear. It is Homer’s word, and it is of certain Stories in Homer that Pindar is thinking when he says that their charm blinds us to their falsity. Even Plato, [...], makes no distinction between the words in his ordinary use of them. It is only when the need arises to discriminate between the false Story and the true, between imagination (as in what we call the Platonic myths) and demonstrable fact, that he follows Pindar and calls the false a Muthos. Yet the converse does not hold, and in normal usage Logos did not mean a true story. It means simply a Story.

(Thomson, *The Art of the Logos* 18-19; Butterick, *A Guide* 145-146. Underlines are mine.)

私たちが知る限り、ミュトス(Muthos)とロゴス(Logos)を最初に区別したのは、ピンダロスだった。「確かにすばらしいことは多いが、思うに、ミュトイ(Muthoi)の中には、巧妙な虚構で飾り立てられており、真実のロゴス以上に人の心を籠絡するものがあるようだ」とピンダロスは言う。ここでは、偽りの物語であるミュトスは、真実の物語であるロゴスと対比されている。ピンダロスは更に言う、「(中略)詩はミュトイによって人間の判断力を奪い去るので、ほとんどの人間には盲目の心が残るだけである」と。ここでも、ミュトスは、偽りの物語である。

こういう用法から、「神話」(‘myth’)は、(the New English Dictionary [Oxford English Dictionary]の語句で言えば)「虚構の物語」(‘a fictitious narrative’)を意味するようになった。虚構の物語を指すのに、ロゴスではなくミュトスが選ばれた理由は、実に明快である。ミュトスがホメロスの言葉だからだ。だから、物語の魅力(charm)によって、われわれには物語の嘘(falsity)が見えなくなってしまうとピンダロスが言う時、ピンダロスの頭にあるのは、ホメロスの物語なのだ。プラトンでさえ、(中略)、普段はミュトスとロゴスを区別していなかった。虚偽の物語(the false Story)と真実の物語(the true [Story])を、あるいは想像(いわゆるプラトンの神話)と明白な事実を、区別する必要が生じたときにだけ、プラトンは、ピンダロスにならって虚偽(the false)をミュトスと呼んだのである。しかし、逆はなかったので、ことばの普通の用法では、ロゴスは真実の物語を意味しなかったのである。ロゴスは単に物語(Story)を意味した。(トムソン『ロゴスのアート』18-19頁；バタリック『案内』145-146頁。下線は平野)

この引用箇所では、ミュトスとロゴスが対立するものとして捉えられている。だから、偽りの物語(ミュトス)と真実の物語(ロゴス)の対立を軸にして話が展開される限り、トムソンの説明は理解しやすい。「神話」(‘myth’)が、The New English Dictionary [現在の Oxford English Dictionary]では、「虚構の物語」(‘a fictitious narrative’)としてミュトスの中に組み入れられているという説明も、納得できる。

理解が困難なのは、最初の下線から一つ前の文である。その文の前半を平易に書き直せば、「ホメロスの物語に魅了されてピンダロスは、物語の虚偽が見えなくなった」、となるだろう。文の後半を、同様に平易に書きなおせば以下ようになる。「ホメロスの言葉すなわち、ミュトスに魅惑されて物語の虚偽が見えなくなったからこそ、ピンダロスは虚偽であるミュトスを危険視し、真実および事実を語るロゴスを重視した」、と。

しかし、トムソンの説明を平易に書き直しても、文意は伝わりにくい。ピンダロスが、ホメロスの物語を肯定しながら否定している点に、分かりにくさの根本があるからである。ホメロスの物語(ミュトス)の魅惑を知悉しているピンダロスは、ミュトスが魅惑的であるが故に、真実および事実(ロゴス)と峻別する必要を感じ、ミュトスの価値をロゴスより低いものとしなければならなかった。魅力的なものは良いとする一つの規範と、魅力よりも真実の方が価値的に上でなければならぬとするもう一つの規範が、ピンダロスの頭の中で交差し、ミュトスとロゴスの序列化が行なわれる。本来異なる二つの規範がピンダロスの価値観によって説明ぬきで、序列化されたのだ。この操作の結果、ホメロスの物語に対する評価が不透明になり、文意が伝わりにくくなったのである。下線を引いた箇所に移ろう。

一つ目の下線を引いた箇所は、プラトンがミュトスとロゴスを「分割する」ピンダロスの思考法を、必要な時だけ支持したと説明している。そして、必要な場合には虚偽をミュトスと呼んだが、真実をロゴスと呼ぶことはなかったという点に、トムソンは注意を促す。つまり、二つ目の下線を引いた文にある通り、ロゴスは真実の物語を意味しなかったのである。ならば、ピンダロスの二分法は、ホメロスによっても、プラトンによっても支持されていないことになる。むしろ、ミュトスもロゴスも物語(Story)という点では同じだと考える方がよい、とトムソンは説いているのだ。

われわれが読みにくさを感じた文は、ミュトスとロゴスを区別し、ミュトスをロゴスの下位に置こうとしたピンダロスの苦渋を語る文であるとともに、ピンダロスの概念操作には無理があることを暴露する文だったのである。

3. ツキュジデスとヘロドトス

「手紙23」の中ほど(本稿43頁参照)に、ツキュジデス(Thucydides)とヘロドトス(Herodotus)が登場している。『ミュソロゴス』第1巻「歴史について」によれば、ツキュジデスは「出来事を報告する人」で、ヘロドトスは、「歩き回って、発見できるあらゆるものを発見し、それから語る人」である。

[Herodotus] says “I’m using this as a verb ‘istorin, which means *to find out for yourself* [...]” [...] After all, Herodotus goes around and finds out everything he can find out, and then he tells a story. It’s one of the reasons why I trust him more than, say, Thucydides, who basically is reporting an event.

(Charles Olson, “On History,” *Muthologos* Vol. I 3)

[ヘロドトス]は言う、「私は、これを動詞ヒストリンとして使う。ヒストリンの意味は、自分で探し出すである(中略)。(中略)つまり、ヘロドトスは、歩き回り、探し出せるあらゆるものを自分で探し出して、それから物語を語る。それが、ヘロドトスの方を私が信用する理由の一つだ。誰よりかと言えば、たとえばツキュジデスより。ツキュジデスは基本的に、出来事を報告する。

(チャールズ・オルソン「歴史について」『ミュソロゴス』第1巻、3頁)

二人の歴史家の違いを上記引用のように考えるならば、「手紙23」で、語り手マクシマスが「おれは、語られていることの証拠を／自分で探すヘロドトスのような歴史家／でありたい」と言うのも頷けるだろう。ヘロドトスこそ、アリストテレスに「ミュソロゴス」と呼ばれた人物だったのだ。その理由について、バタリックは、トムソンの著書を解説しながら明らかにしてくれる。

Thomson points out that Herodotus was called “the *Muthologos*” by Aristotle, and that “What it all comes to is this, that for the audiences which harkened to the Stories a Muthos was a Logos, and a Logos a Muthos. They were two names for the same thing” (*Art of the Logos*, p.19).

(Butterick, *A Guide* 146)

トムソンは、ヘロドトスがアリストテレスによって「ミュソロゴス」と呼ばれたと指摘している。そして、「結局のところ、物語に耳を傾ける聴衆にとっては、ミュトスがロゴスであり、ロゴスはミュトスであったのだ。ミュトスとロゴスは同じものを指す二つの名前だった」(『ロゴスのアート』19頁)。(バタリック『案内』146頁)

トムソンによれば、もともと、ロゴスは「ことば」(‘word’)や「理性」(‘reason’)ではなく、単に「語られていること」(‘what is said’)を意味したのである。

Logos did not originally mean ‘word’ or ‘reason,’ or anything but merely ‘what is said.’

(Thomson, *The Art of the Logos* 17; Butterick, *A Guide* 146)

ロゴスは、もともと「ことば」や「理性」を意味しなかった、単に「語られていること」を意味した。(トムソン『ロゴスのアート』17頁; バタリック『案内』146頁)

話を整理すると、こうなるだろう。ミュトスが虚偽で、ロゴスが真実であるという二分法は、

常に有効とはいえない。むしろ、虚偽でありながら同時に真実であり、真実でありながら同時に虚偽であるようなことを語る者、すなわち「ミュソロゴス」になることが私の願いだ、と語り手マクシマスは言っている、と。これは、ピンダロスには把握できなかった考え方である。語る内容が(1)魅惑に満ちた虚偽および虚構(ミュトス)なのか、(2)事実および真実(ロゴス)なのか、とピンダロスのように二分するのではなく、ミュトスもロゴスも、語るという点では同じだという、結合の思考法がミュソロゴスであり、また、そのように語る者がミュソロゴスと呼ばれるという、決定的に新しい考え方がここで示されている。

あるいは、こうも言えるだろう。「物語」(Story)においては、語る内容が虚偽および虚構(ミュトス)であるか、事実および真実(ロゴス)であるかという、語る題材の真偽は問題ではないのだ、と。ピンダロスが苦渋に満ちた概念操作を行なう必要があったのは、語る題材の真偽が、「物語」の真偽を決定すると考えたからである。そうではなく、ミュソロゴスという考えにおいては、「物語」は、語る内容の真偽の区別を超越しているのである。「物語」に関する考えをトムソンが、一歩進めたことの意義は大きい。

Ⅲ. 「詩と真実」

1. ベロイト大学での連続講演

「ミュソロゴス」の意味を確かめた今、ようやく我々は、オルソンの『ミュソロゴス』(Muthologous)を読む準備ができたと言えるだろう。『ミュソロゴス』の第2巻に収められた「詩と真実」(“Poetry and Truth”)は、1968年の3月25日、3月27日、3月29日の三夜にわたってウィスコンシン州のベロイト大学(Beloit College)で行なわれた、詩に関する連続講演である。講演の冒頭で、タイトルがゲーテの『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit)の英訳だと言いながら、サブタイトルは「体験の教条的本質」(“The Dogmatic Nature of Experience”)であると言ってオルソンは、聴衆やわれわれ読者を面食らわせる。

この三夜にわたる講演は、詩とはどういうものであるかを聴衆に分かってもらうためにオルソンが行なった、渾身の語りかけである。オルソンは、講演の中に自作『マクシマス詩篇』からの朗読をたっぷりと入れ、詩の不思議な魅力の中に聴衆を引き込むことによって講演を興味深いものにする戦略を用いている。だが、朗読される詩は、必ずしも講演で語った事柄の例証になってはいない。そこに、巧まざるユーモアが生まれるとともに、詩の純然たる力が噴出する契機ともなる。聴衆に語りかけ、聴衆とのやりとりによって進む部分には、瞬時の言い換えが連続し、思考の飛躍、前言の修正が見られる。オルソンは、語りながら考えているのだ。したがって、伝わったのは、一貫性を持つ講演内容であるよりは、語る時の息(プレス)や、思考の内容そのものの生き生きとした動きだと言えよう。

この連続講演の価値は、語られた内容の論理的一貫性ではなく、オルソンという茶目っ気のある人物が三日にわたって壇上に現われ、何事かを語った時に伝わってきた、途方もないエネルギーにあったようだ。聴衆はオルソンを好ましく思ったらしく、9時に終わるはずの講演が終わらず、「今、何時かな?」とオルソンが聞くと、聴衆の一人が「9時10分だよ」と答える、といった和やかな雰囲気は講演会場には醸し出されていた。

オルソンの講演内容が、あまりにも多岐にわたるため、講演そのものがどこへ向かうのか分からなくなる事もしばしばあった。それにも拘らず、講演者オルソンの息(プレス)は確実に聴衆と読者に伝わり、思考のプロセスも如実に感じ取ることができる、そういう講演であった。したがって、この講演自体を、オルソンが提唱した「投射詩論」(“Projective Verse,” 1950)の

実践だと考えることができる。

以下に「投射詩論」の要諦を3つ挙げる。

- (1) the *kinetics* of the thing. A poem is energy transferred from where the poet got it [...], by way of the poem itself to, all the way over to, the reader. Okay. Then the poem itself must, at all points, be a high energy-construct and, at all points, an energy-discharge.
- (2) is the *principle*, [...] : FORM IS NEVER MORE THAN AN EXTENSION OF CONTENT.
- (3) the *process* of the thing [...]: ONE PERCEPTION MUST IMMEDIATELY AND DIRECTLY LEAD TO A FURTHER PERCEPTION.

(Charles Olson, "Projective Verse," 1950. *Selected Writings* 16-17)

- (1) 事物の力学。詩とは詩人がエネルギーを得た場所から（中略）詩自体によって、はるばると読者のところまで届けられるエネルギーである。分かるだろう。だから、詩自体が、あらゆる点で、高エネルギー構造体とならなければならず、あらゆる点で、エネルギー放射装置とならなければならないのだ。
- (2) は原理である（中略）。形式は内容の延長以外のものではない。
- (3) は事物のプロセスである（中略）。一つの感受性は即座に直接次の感受性に移行しなければならない。

（チャールズ・オルソン「投射詩論」、1950年。『オルソン選集』16-17頁より）

また、本題になかなか入らずに、そのまわりをぐるぐると回るように見える「詩と真実」の構成全体が、オルソンの詩論とも繋がっているようだ。『マクシマス詩篇』『手紙15』で、オルソンの友人はこう言う。

Maximus, to Gloucester

LETTER15

[...]

He sd, "You go all around the subject." And I sd, "I didn't know it was a subject." He sd, "You twist" and I sd, "I do." He said other things. And I didn't say anything.

(*Maximus Poems* 72)

マクシマスから、グロスターへ

手紙15

(略)

「あんた、本題のまわりをぐるーっと回るね」と奴が言った。「本＝題か、気にしてなかった」と答えるおれ。「紆余曲折するんだね」と奴が言い、「そうさ」とおれは答える。他のことも聞かれたが答えなかった。

(『マクシマス詩篇』 72頁)

「本題のまわりをぐるーっと」回り、「紆余曲折する」進み方が、詩にせよ、散文にせよ、また講演にせよ、オルソンの語り方の特徴であるようだ。上の詩中で、ぶしつけとも思える指摘をしている「奴」とは、オルソンより17歳年下のアメリカ詩人ポール・ブラックバーン (Paul Blackburn, 1927-1971) である。

2. ミュトス、ロゴス、ミュソロゴス

さて、最も肝心な点に入ろう。「詩と真実」の中に以下のような箇所がある。

I don't know how immediately and how early this was his name—the Logographer—in contrast to Homer, who was to the Greeks the *Muthologos*. I hope you hear that switch. It's a most exciting switch, to my mind, because actually what you call Herodotus' stories are known to the Greeks as *logoi*. [...] Actually *logos*, in my mind right now, logic or ////[deliberate stutter] is ///, is like *s st st* story, and is, like, only story. And that when you have subjects like psychology (*sic*) and psopology (*sic*), you're actually only having the stories of—and history is, like, so. At this point, happily, we can say mythththology (*sic*) is stories of myths—which is the word “mouth.” *Muthos* is mouth. [sputters] And indeed *logos* is simply words in the mouth. [...]you'll find that what you have to say *muthologos* is, is “what is said of what is said”—as suddenly the mouth is simply a capability, as well as words are a capability [...] *logos* there, as I think even the Greeks in calling Herodotus the Logographer mean it—that he who can tell the story right has actually not only, like, given you something, but has moved you on your own narrative. (“Poetry and Truth,” *Muthologos* vol. II 37-38. Ellipses are mine.)

どれほど早くからヘロドトスがこういう名前と呼ばれていたか私は知りません—ロゴグラファー [言葉の記述者] —という名前、ホメロスとは対照的な呼び名です。ホメロスはギリシャ人にとって、ミュソロゴスでした。この転換を聞いてほしいのです。これは、私の頭の中では、もっとも刺激的な転換です。なぜかという、いわゆるヘロドトスの物語と呼ばれるものは、ギリシャ人にはロゴイとして知られていたのです。(中略) 実際、ロゴスとは、今現在の私の頭の中では、論理あるいは///// [入念な口ごもる声] は、/// で、それはス、スト、ストーリーのようなものです。ただ、ストーリーにだけ似たものです。そして、あなた方が、心理学 (psychology) とか、考古学 (psopology) などの学問を手にとるとき、あなた方は、実は物語を手に行っているにすぎません—そして、歴史も同じことなのです。この点で、私たちは、神話学 (mythththology) が、神話についての物語だと言うことができます—神話は「口」という言葉です。ミュトスは、口なのです。[唾を飛ばす] そして、ロゴスとは、単に口の中にある言葉にすぎません。(中略) あなた方は知ることになるでしょう、ミュソロゴスとは、「語られていることについて語られていること」だと—不意に口が単なる可能性になります、言葉が可能性であるように (中略) その場合のロゴスとは、ギリシャ人でさえヘロドトスをロゴグラファーと呼んだのですが、こんなつもりだったのではないかと私は考えています—物語を正しく語ることのできたヘロドトスは、人々に何かを与えただけではなくて、人々が各々の物語を紡ぐように駆り立てたのだ、ということです。(『詩と真実』『ミュソロゴス』第2巻 37-38頁)

この箇所を読むと、ミュトスが偽りで、ロゴスが真実であるという前提が誤りだという議論も (本稿45-46頁参照)、ミュソロゴスと呼ばれた歴史家がヘロドトスで、マクシマスは「ヘロドトスのような歴史家になりたい」と語っていたこと (本稿47頁参照) も、意味を失う。「詩と真実」では、「ミュトスは口」で、「ロゴスとは口の中にある言葉」にすぎないとされている

からだ。ならば、ミュトスが偽りで、ロゴスが真実であるというピンダロスの前提は、議論する必要がなかったことになる。また、ミュトスもロゴスも「物語」(Story)という意味では同じなのだ、という決定的に新しい考え方も、「ミュトスは口」で、「ロゴスは口の中にある言葉」にすぎないという新たな断定の前では、行き場を失う。さらに、「詩と真実」の中で、ヘロドトスは「ミュソロゴス」ではなく、ロゴグラファー(言葉の記述者)とされ、「ミュソロゴス」はホメロスだと語られている。

これほど多くの根本的な修正を迫られると、われわれは、「手紙23」に即して行なってきた議論をいったん無に帰して、もう一度始めから、ミュトス、ロゴス、ミュソロゴスなどの概念を組み立て直さなければならなくなる。その仕事に要する時間と労力を考えると、われわれが麻痺に似た無力感に襲われたとしても、不思議はないのである。

しかし、今われわれが目撃しているオルソンの行為こそ、「詩と真実」の核心部を形成する行為なのだ。つまり、自分自身が過去において書いた文や諸前提に縛られることなく、詩とは何であり、真実とは何であるのかを、勇気をもって考え直すプロセスが「詩と真実」の正体なのである。1953年に『マクシマス詩篇』の一部をなす「手紙23」が書かれた。「詩と真実」の講演が行なわれたのは1968年である。だから、「詩と真実」は15年前に書いた詩「手紙23」とらわれることなく、オルソンが新たに詩と真実に関する暫定的な解答を提出したものである、と考えるべきなのだ。

だが、「もう一度始めから、ミュトス、ロゴス、ミュソロゴスの概念を組み立て直す」必要に気付いたわれわれが、「麻痺に似た無力感に襲われた」のも事実である。どうして、このような事態に立ち至ったのかを考えてみよう。

われわれが、「手紙23」の解釈に用いた思考の枠組みを、その15年後に書かれた「詩と真実」にそのまま当てはめようとしたところに無理があったのである。過去を基準にして未来を判断しようとしたのだから。それは、「手紙23」と「詩と真実」の間に横たわる15年の歳月を無視することであったと言える。この無理を悟ったからこそ、われわれは「麻痺に似た無力感に襲われた」のである。

ただし、「手紙23」と「詩と真実」には15年間の隔たりがあるとはいえ、一つの共通点があることも確かなのである。それは、ヘロドトスに対するオルソンの強い尊敬の念である。どういう底の尊敬の念であったのかについては、上に掲げた「詩と真実」からの引用の最終三行をご覧いただきたい。そこには、ロゴグラファー(言葉の記述者)と呼ばれたヘロドトスは、正しく語ることによって、聴衆が自分で物語を書きたくるようになり立てた、と記されている。「ヘロドトスのような歴史家になりたい」というオルソンの気持ちは、15年前に「手紙23」を書いていた時と少しも変わらないのである。「詩と真実」では、「ミュソロゴス」という最高の呼び名をホメロスのものとし、ヘロドトスは、つつましく「ロゴグラファー」(言葉を記述する人)となっているけれども、オルソンが目標とする歴史家は一貫してヘロドトスなのだ。

「手紙23」でわれわれが学んだことは、「ミュソロゴス」が、真偽の区別をこえた「物語」(Story)を意味し、ヘロドトスがミュソロゴスと呼ばれていたことである。

15年後に発表された「詩と真実」では、「ミュソロゴス」が定義直されている。「ミュトスは口で、ロゴスとは、単に口の中にある言葉」にすぎず、「ミュソロゴスとは、『語られていることについて語られていること』」である、と。また、「不意に口が単なる可能性になる、言葉が可能性であるように」と補足されている。そして、ミュソロゴスと呼ばれているのは、ホメロスである。

「詩と真実」における「ミュソロゴス」の説明は、分かりにくい。ただ、オルソンが、言葉の発せられる場所に焦点を移し、根源的な発話行為から「ミュソロゴス」を定義し直そうとしていることは理解できる。「ミュトスは口で、ロゴスとは、単に口の中にある言葉」であるという定義に従えば、ミュトスは、ロゴスを生む母胎もしくは容器のように思われる。「不意に口が単なる可能性になる、言葉が可能性であるように」は、ミュトス（口）もロゴス（口の中の言葉）と同様、実体として存在するのではなく、言葉が口から発せられる時に存在し始める、という事態を明らかにするであろう。

「ミュソロゴスとは、『語られていることについて語られていること』だ」は、「ミュソロゴス」が語り直しであることを示唆している。ならば、ホメロスがミュソロゴスと呼ばれていた理由は以下のように解釈できるだろう。ホメロスの叙事詩は、全部が創作であるというよりは、語られてきたことを語り直したものである。語られていること（what is said）は、「手紙23」では、ロゴスとされ、究極的にはミュトス同様、「物語」（Story）の呼び名のひとつとされていた（本稿47-48頁参照）。「語られていること」を含む「物語」がすでに真偽の別を超えているのだから、語られていることの語り直しの中では、真偽の区別をはるかに超えた物語が展開され、その語り口は、ホメロスの文体として結実している。この時、「ミュソロゴス」＝「語られていることについて語られていること」は、ホメロスの叙事詩を意味し、また、「語られていることを語り直す」ホメロスをも意味するのだ、と。

「手紙23」では、「歩き回って、発見できるあらゆるものを発見し、それから語る人」ヘロドトスがミュソロゴスと呼ばれていたが、「詩と真実」においては、ホメロスがミュソロゴスと呼ばれている。これは、ミュソロゴスの意味が「物語」（Story）から、「語られていることについて語られていること」へと深化し、生き生きとした歴史の記述者から叙事詩人へと指示対象が移ったためである。その結果、ミュソロゴスにはホメロスがふさわしく、ロゴグラファー（言葉の記述者）には、ヘロドトスがふさわしいことが明確になったのである。

3. 『マクシマス詩篇』と「詩と真実」

「詩と真実」の講演をした1968年にも、オルソンは『マクシマス詩篇』の第三巻を執筆していた。『マクシマス詩篇』を書き終えた後に、「詩と真実」の講演をしたのではなく、『マクシマス詩篇』執筆中に「詩と真実」の講演がなされたのである。したがって、「詩と真実」は、『マクシマス詩篇』から大きく距離をとったところに成立したのではなく、むしろ『マクシマス詩篇』を完成に向かわせるために、聴衆に語りかけながら自らの詩と詩論を検証したものだだったと考えられる。「詩と真実」を検討したわれわれは、最後に『マクシマス詩篇』の「手紙23」に戻ってみよう。

特に、「おれはヘロドトスのような歴史家でありたい…」から後の方を検討しておきたい（本稿43-44頁参照）。二度目の引用になるが、便宜のため日本語訳のみ挙げる。

この原野で起こったグロスター住民とプリマス住民との争いは、
一つの植民地ともう一つの植民地との争いに

とどまらない。それは、全面戦争なのだ。敵は、まず（1）商業主義（中略）
それに（2）生まれたばかりの

資本主義だ。ただし、個々の冒険商人と労働者が、分け前にあずかる
段階に留まるなら、話は別—敵は、墮落する国家主義全体なのだ。所有権が

共同体に割り込む、商工会議所や、神権政治、
あるいは、市政担当官の形をとって

ここでオルソンが描いているのは、江田孝臣が指摘するように、「プリマス植民地のピューリタンたちと、ヨーロッパからもっぱら漁業のために移り住んできた零細漁民たち」（江田109）との争いである。プリマス住民とグロスター住民の争いは、漁業足場の奪い合いとなって顕在化し、軍人マイルズ・スタンディッシュ（Miles Standish）がプリマス住民の利害を守るために、グロスター住民を撃ち殺さんばかりになる、という事態にまで発展する。清教徒とグロスター住民の対立は、表面的には「一つの植民地ともう一つの植民地の争い」であるが、その内実は商業主義および資本主義と素朴な第一次産業従事者との対立であることを、語り手マクシマスは見抜いている。

政治と宗教の一致を目指して新大陸にやってきた清教徒たちは、やがてニューイングランド・マネーを動かすようになり、商業主義や資本主義に染まっていく。第一次産業や素朴な売買から離れ、さまざまな腐敗と結びついて、アメリカ全土を墜落させたのは、清教徒たちが動かすようになったニューイングランド・マネーなのだ。『マクシマス詩篇』『手紙16』にアメリカを腐敗させる元凶となったニューイングランド・マネーの記述がある。

that movement of NE monies

away from primary production & trade
to the several cankers of profit-making
which have, [...], made America great.

(*The Maximus Poems*, "Letter 16" 76)

ニューイングランド・マネーの動き

初期の産業と売買から離れ、
様々な腐敗と結託して利潤を追求するニューイングランド・マネー。
アメリカが大国にのし上がったのは（中略）腐敗のおかげ。

(『マクシマス詩篇』『手紙16』 76頁)

漁師たちの質素で素朴な暮らしと、アメリカ全土に腐敗を拡大する大規模な資本（ニューイングランド・マネー）投下と利潤追求との対立を、マクシマスが、「グロスター住民とプリマス住民」の争いに見ていることは言うまでもない。

様々な歴史資料を調べ、動き回り、透徹した眼力によって事物の本質を見抜くオルソンは、「歩き回り、探し出せる何もかもを自分で探し出して、それから物語を語る」ヘロドトスと似てはいないだろうか。似ていたとすれば、それはオルソンがヘロドトス同様に、ロゴグラファー（正確な言葉を書く人）になっているということである。ホメロスのように「語られていることを語り直す」時、語る材料の真偽をはるかに超えた世界を作り出す大詩人「ミュソロゴス」とは呼ばれないにしても、グロスターを起点にして透徹した眼でアメリカの歴史を浮き彫りにする詩人オルソンは、「ロゴグラファー」と呼ばれるにふさわしい。

われわれのロゴグラファー、チャールズ・オルソンは、アメリカの悪を見据えながら『マクシマス詩篇』を書き続けた。その営為は、アメリカの悪を見据えるだけでなく、自らの内部を検証することも要請する。オルソンは自らの存在の根拠をも『マクシマス詩篇』執筆によって、

問い続けたのだ。詩人の探求は、宇宙と自己との関係をどこまでも新たに問い直す、終わりのない探求となる。精神と肉体の限界へ向かうこうした行為の全体を、オルソンは正確な言葉で書いたのである。その営為が死によって終わるのは、「詩と真実」の講演を行った1968年3月からほぼ2年後の1970年1月のことであった。

IV. 結び

われわれは最初に提出した問いに答えなければならない。それは、「詩と真実」(1968)がオルソンの詩学の要としてどのような役割を果たしているかである。「詩と真実」においては、第一に、ホメロスのようなミュソロゴスとして『マクシマス詩篇』(1975)を書くのではなく、ヘロドトスのようなロゴグラファーとして『マクシマス詩篇』を書くのだという、決意の表明がなされている。ホメロスの叙事詩のように「語られていることを語り直す」原理によってではなく、「自分で歩きまわって探し、見出したことを語る」歴史記述の方法によって『マクシマス詩篇』を書く、という意味である。

第二に、「詩と真実」には、「投射詩論」(1950)からの大きな変化があったとは言えないことがその特徴である。「投射詩論」を体現しながら、どこまでも始まりへ向かう、オルソン独自の動きが、また新たに始まるだけである。ただし、詩の主題と方法には、途方もない深まりと率直さが見られる。そこには、「投射詩論」が『マクシマス詩篇』執筆開始と同年の1950年に発表されたものであるのに対して、「詩と真実」が、『マクシマス詩篇』の絶筆間ちかになされた講演であるという事情が関係している。

深さと率直さとの併存は、すでに「投射詩論」で見られたが、「詩と真実」の講演を行なう頃の『マクシマス詩篇』が開拓した時空は、日常と連続していながら、そのまま宇宙へ繋がっているような時空間なのだ。そこを歩む語り手マクシマスの足どりも、足取りを記述するオルソンの手の動きも、言語表現の限界を突き破っているように見える。

ヘロドトスの『歴史』を範とする『マクシマス詩篇』には、生き生きとした歴史記述に必要な深さと率直さの両方が要ることを、「詩と真実」は示している。事実、深さと率直さとの併存によって、『マクシマス詩篇』は、歴史を生き生きと記述することから生まれる効力を存分に発揮しているのである。

この効力によって、日常と宇宙的時空間は驚くほど近くなり、『マクシマス詩篇』の読者は自らの作品を書き始めるよう常に促されているのだ。したがって、われわれはオルソンをヘロドトスと同じくロゴグラファー(正確に記述する人)と呼んでよいのである。

言うまでもないことだが、付け加えておこう。ロゴグラファーと呼べる詩人は、20世紀後半にはきわめて稀な存在である、と。

参考文献

- Butterick, George F. *A Guide to The Maximus Poems of Charles Olson*. Berkeley: University of California Press, 1978.
- Olson, Charles. *The Maximus Poems*. Ed. George F. Butterick. Berkeley: University of California Press, 1983.
- , *Muthologos*. 2 Vols. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, 1979.
- , *Selected Writings*. Ed. Robert Creeley. New York: New Directions, 1966.
- 江田孝臣「メルヴィルとアメリカ現代詩—ウィリアムズとオルソンの場合」中央大学人文科学研究所編『メルヴィル後期を読む』。中央大学出版部、2008年。99-122頁。